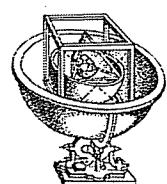


科学と宗教

アナトーリ・A・ログノフ

松本幸重訳



約五万年前の石器時代のことと、人間も原始社会もかなり高い発展段階に達してからでした。宗教の発生は、何よりもまず人間の知性の高い水準、つまり、理論的、抽象的な思考が形成されはじめた水準と結びついています。宗教的な考えの発生についてはさまざまな説明を試みるところが可能です。しかし、どうしようもない事実として残るのは、このような考えが地球上の、お互いに十分に離れたさまざまな地域の人々のところで発生したこと、そして驚くべきことに彼らのこういった考えの本質がほ

時間が経過し、人類はひじょうに高度な発展段階へ達しました。しかし、宗教的な考えは消滅しないどころか、むしろ逆に人間の意識にさらに深く浸透しています。これらすべてのことと説明できるのは、宗教的な考えは人間の欲求であり、人間の精神的本性そのものに固有であるということによつてだけです。だからこそ、宗教的な考え方を根絶しようとするいかなる試みも、結局は失敗する運命にあるのです。しかしながら、もしこれらの宗教的な考えが力ずくで植えつけられるならば、人間の本性

実生活がはつきりと示しているのは、宗教的な考えはひじょうに多くの人々の人間精神と理性の自然の欲求だと
いうことです。

滅するだらうという意見を述べました。とりわけ宗教の消滅は社会主義思想の発展と結びつけられました。社会主义思想は一連の工業的に発展した国でほんとうに実現されました。にもかかわらず、そのことがこれらの国における宗教的な考え方の衰退をもたらしはしませんでした。問題は、われわれが目にしているように、これらの学者たちが考えたよりもはるかに複雑です。明らかに本質は、人間の精神的本性そのものに、人間の思惟にあるのです。キリスト教徒たちは完全な権利をもって、この性質は造物主によつて各人に組み込まれたのだと見なすことができます。しかし、同時に、各人は選択の自由をもつています。宗教的な考えは長期間にわたり、人間についても、人間を取り巻く世界についても、すべての観念をカバーし、形成してきました。私が思うには、ま

自己にとつて破滅的な道に踏み出したのです。造物主は人間に認識のための強力な創造的本質を組み込み、これによって人間を人間たらしめました。そして教会は、人間に組み込まれたまさにこの主要なものを一掃しようとしたのです。ここに教会の悲劇的な過ちがあります。まさにこの過ちに基づいて、古代ギリシャの哲学者たち——ヘラクレitus、デモクリトス、エピクロスが述べた思想との矛盾、ときにはこれとの闘争が生じはじめたのです。私の見解では、これは宗教と科学の闘争ではないことに、この闘争は教会の迷妄のためにきわめて長い期間続きました。カトリック教会がアリストテレスを自然の問題における教会にとっての最高権威として承認したとき、とくに深刻な時代が訪れました。こうしてドグマが生まれ、これが科学の発展に枷かせをはめました。しかし絶えず教会の断罪者的な活動の強化が進行しました。十三世紀、愛と慈悲の宗教を普及させるために、という名分のもとに、教皇の異端審問が展開されたあ

とで、トマス・アクイナスはこう書きました。「教会に關して言えば、教会は慈悲に満ちており、道に迷つた者たちを改宗させようと努めている。そのため、教会はすぐには断罪しない。しかし、使徒が教えているように、一度目と二度目の説教のあとで断罪する。もし異端者がそのあとも強情を張るなら、教会はその者の改宗に期待をかけず、他の者たちの救済を考え、その者を破門によって教会から排除し、さらに俗界の裁判官に引き渡す。裁判官がその者を死によって世界から排除するためである。もしごくらの異端者がこのようにして絶滅されるならば、これは神のご命令に背くことにならないだろう」。何という恐るべき考えであり、行動でしょう！ これらは人類の發展に、その知性と精神の發展にとてもない害を与えたかったでしようか。何しろ、實質上これらは人間に思考し、真理を探求するのをやめることを要求したのです。つまり、教会はまさに造物主が人間に創造的本質を組み込んだことを理解できなかったのです。教会は自己の最高の精神的牧父たちにおいて、事實上、造物主の思想から離れたのです。異端審問の時代が始まりました。

異端との闘争はカトリック教会によって何世紀にもわたって行われました。自然科学の發展は、しっかりとした觀察や実驗に立脚していかつたため、最初のうちはカトリック教会にとって何ら深刻な危険にはなりませんでした。科学は古代のすぐれた哲学者たちの思想に追随しつづけていましたし、しかもこれらの研究は時として形式的、スコラ的な性格を帶びていましたから、聖職者たちから見て、キリスト教の教義の根本には少しも触れる力を強化しようと努めました。

ことがありませんでした。少し時代が進んで、鍊金術がある程度の普及を見たとき、鍊金術師への迫害が始まりました。一一六三年、教皇アレクサンデル三世は大勅書を発し、聖職者に「化学または自然法則の研究」を禁じました。当時、このような活動に携わっていたのはだいたい聖職者だけでしたから、この禁令は事実上科学の發展を停止させました。一二一七年、教皇ヨハネス二十二世が発した大勅書では、化学を研究することが「悪魔の七つの術」の一つとして禁じられました。しかし、科学の發展を止めることはもう不可能でした。これは社会の必要によつて呼び起されたものであり、また、その發展は人間の知性の本性、すなわち認識欲によつてもたらされたものだったからです。

古代の学者たちの周囲の世界についての觀念に立脚していたキリスト教の教義は、新しい科學研究の圧力に持ちこたえることはできませんでした。この面でとくに卓越した役割を果たしたのは、コペルニクスです。彼は一五四三年に刊行されたその主著『天球の回転について』で太陽中心説を唱えました。この説によれば世界の中心

にあるのは太陽です。教会はコペルニクスの学説の革命的性格をすぐには理解できず、このため彼の本が禁書になったのはようやく一六一六年になつてからでした。この時には、すぐれた思想家のジョルダーノ・ブルーノやガリレオ・ガリレイがコペルニクスの学説をすでに發展させていました。教会はこの研究方向がキリスト教の教義にとつて直接的な危険をもつてゐるのに気づきました。しかし實際には、宗教としてのキリスト教にとって、いかなる危険もありませんでした。危険があつたのは、教会が根拠もなく教義の中に含めた命題にとつてだつたのです。コペルニクスの本は一八二八年まで禁書になりました。

コペルニクスの学説の繼承者たちと教会の闘争で最初の犠牲者になつたのはジョルダーノ・ブルーノで、彼は一六〇〇年に火刑に処せられました。ブルーノが告発されたのは彼がコペルニクスの追随者であつただけではなく、キリスト教信仰の一部の命題に同意しなかつたためでもあります。こうして異端は教会によつて弾圧されたのです。まもなくガリレイに対する教会の闘争が始まり

ました。これは一六一六年からガリレイが一六四三年に死ぬまでずっと続けられました。一六一五年、枢機卿のペラルミンはガリレイの支持者にこう書きました。「もし、地球の運動についての仮説と太陽の不動がすべての現象を離心円と周転円を採用するよりもよく描き出すことができると言うなら、それはまったく問題のない言であつて、何らの危険ももたらさない」。ガリレイには自分の科学的見解と絶縁することが提案されました。なぜならば、枢機卿の意見によれば、地球が太陽の周囲を回っていることを認めるのは「聖書の命題が虚偽であることを示して、神聖な信仰に害をおよぼすことを意味するであろう」からです。コペルニクスの学説の本質に関する決定が採択されたが、そこにはこう書かれていました。この学説は「哲学的に愚かしく、無意味であり、形式的に異端である。何となれば、この学説は聖書の教えにその多くの箇所で矛盾しているからである。聖書の言葉の意味に関しても、神父と神学者たちの共通の解釈に關しても」。ガリレイは、異端審問のためにフレンツェからローマに呼び出され、厳しく次のように警

告されました。「地球が太陽の周囲を運行し、太陽が世界の中心に止まつていて、東から西へ運行しないという、コペルニクスの作とされる学説は、聖書に反する。ゆえにそれを擁護することも、保持することも、してはならない」。フレンツェに帰還後、ガリレイはコペルニクスの学説についてその虚偽と異端性を指摘しましたが、しかしこれだけではやはり、彼が心からこの学説を放棄したと教会が信じるには不十分でした。一六三三年、教皇ウルバヌス八世の命により、ガリレイは再び裁判所で審問を受けました。ガリレイはこの時すでに七十歳で、自説を曲げないと同時に自分を待っているものを理解し、自己の見解を放棄する決心をしました。彼は異端審問裁判所で次のように言明しなければなりませんでした。「誠心誠意、偽りのない信仰をもつて、前述の思い違いと邪論、および聖なる教会によつて前述されたあらゆる唾棄すべき思い違いと分派的意見全般を私は放棄し、呪詛し、これを憎悪すべきものと宣言する」。これ以後、ガリレイの科学研究は不可能になりました。彼はこのあと約十年生きましたが、死の少し前になつてようやく監

禁を解かれました。自然科学の創始者の一人だったこの大学者はこのような試練に遭わねばならなかつたのです。

弾圧のほか、教会はコペルニクスの学説に系統的な批判を加えました。ここにそういう批判の見本が一つあります。キアラモンティの著作に次のような箇所があります。「運動する能力をもつ動物は手足と筋肉をもつている。地球は手足も筋肉ももつていない。したがつて、地球は運動することができない。土星、木星、太陽、その他惑星を動かしているのは天使たちである。もし地球が運動するなら、その中心には、それを動かすような天使がいなければならぬ。しかし、そこに住んでいるのは悪魔だけである」。こういう論証法のすべてが証明しているのはただ一つ、教会は実質上、愚鈍と蒙昧を擁護していたのであります。それによつて自然科学の発展における重大なブレーキになつてゐたということです。コペルニクスの学説の支持者たちは大学から追放され、自己の著作を刊行することが許されませんでした。コペルニクスとガリレイの著作に立脚した地球の地質学に関する著

作でさえも、焚書処分にされました。十七世紀の初め、パリ大学の神学部は、ド・クラワ、ビトー、ド・ビリオンの三人の地質学者を大学とパリから追放し、彼らの著作を焼却する決定を採択しました。十八世紀の半ばでさえ、大学者のビュフォンは地質学に関する自分の著作を否定し、おおやけに次のように声明することを余儀なくされました。「私は、聖書のテキストに異議を唱えるいかなる意図ももたなかつたこと、自分が時間に関して事実そのものに關しても天地創造について聖書に述べられてゐる一切のことをもつとも確固として信じていることを声明する。私は、地球の形成に關して自分の本に述べられてゐる一切のこと、および一般に、モーセの叙述に矛盾する可能性のある一切のことを否認する」。

学者を迫害したのはカトリックだけではありません。プロテstantも迫害しました。エンゲルスはこう書いています。「プロテstantは自然の自由な研究の迫害ではカトリックをしのいだ。カルバンは、セルベツスが血液循環の發見のすぐ間近まで迫つていたとき、彼を火刑に処した。しかも、二時間も生きながら焼くように命

じた。セルベツスの告発に少なからざる役割を演じたのは、彼の地理学に関する研究でした。セルベツスが刊行した地理学に関する著作に、ユダヤの地の自然が、彼が目にしたとおりに、乾燥した、収穫の乏しい、貧しい地方として描かれたのです。これらのことはすべて、容易に確認できたでしょう。しかし、これらの事実は、甚だしく侮辱するもの」と評価されたのでした。

聖職者たちは学者を追害しただけではなく、その本や著作まで焼却しました。焼却されたのは新しい著作だけではありませんでした。以前に刊行された貴重な本まで焼かれ、これによって人類の文化遺産が消滅させられたのです。枢機卿のヒメネスはグラナダで膨大な量の、文

「お前にてし、少し貴重なアラビア語の書物と手稿を持参
に處しました。トルケマーダはヘブライ語の数冊の聖書
を焼くように命じ、後にはサラマンカで六千冊以上の本
を焼却しました。これらの本は「ユダヤ教、魔術、魔法、
その他の迷信に冒されている」からだとのことです。
われわれが目にしているのは、聖職者たちが故世(死)す

もわたり科学に対する積極的な闘争を行つたのに、しか
し教会は無力であり、すでに自然科学の發展を止めること
ができなかつたということです。科学の力強い前進を
J・V・ドレーパーは次のように描写しています。「笏
杖は別の手に移つた。自然はあらゆる方向で研究された。
そして至るところで、新しい研究方法が思いがけない、
すばらしい成果をもたらした。苦むした聖堂の廢墟の上
には、近づきつつある昼に驚愕し、目のくらんだ聖職者
たちが重々しく座り、周囲の世界と光に目をふさぎなが
ら、過ぎ去つた夜の思い出にふけつてゐる。かつての幻
影と迷妄の回復を夢見ながら、そして、大胆にあまりに
もそばまで近づいてくる攻撃者たちすべてを憎々しげに
げとばしながら」と。

ロシア正教会もまた積極的に、ただし、厳しさの点で
は少し劣りますが、科学と鬭争を行いました。正教会の
強い影響のもとで、しばしば教授科目から、学生の自然
科学的な世界觀の形成に影響を与えかねない科目のすべ
てが外されました。そのさい、それらの科目の教授たち
も大学から追われました。一八一〇年にはカザン大学で、

創り給うた人間を解剖学の標本に使用し、人間をばらばらにしたものをアルコール漬けにして保存するのは忌まわしく、神に背くことだという申し入れをした。この結果、棺桶が注文され、その中に乾いた標本とアルコール漬けの標本のすべてが収められ、追悼祈禱のあと、盛大な葬列を組んで墓地へ運び、埋葬したのです。一八五〇年には教授科目としての哲学がロシアの大学で廃止され、神学の教授たちの管轄に移されました。大学に哲学講座が復活されたのはその十三年後のことでした。とりわけ、正教会の危惧を呼び起したのは地質学の研究です。府主教フィラレートは地質学の本についてこう書いています。「球全体がその軸の上で回転した。だが、軸はどこから現れたのか？ そして誰が回転を起こしたのか？」。こういう問い合わせ聖職者たちに生まれたのは、地球の回転に関するでした。正教会の科学との闘争は、聖職者たちの完全な科学的無知を反映していました。しかし、しだいに正教会も科学との相互関係では慎重になつてきました。

「インテリ連中」の活動の産物だったと主張しました。

インテリゲンチアのこの部分のイデオロギーは、道標派の目には歴史的に不毛であり、有害であると映つたのでした。その後にロシアで展開され、大量の人々の非業の死を招いたプロセス、さらに、現在進行しているプロセスに照らしてみると、道標派はきわめて先見の明のある政治家たちであつたとはつきり断言できます。しかし、時機は失われ、すでに彼らは迫りつつあった革命の大波に抗することができなかつたのです。民衆は苦しい生活をしており、すでに革命的な呼びかけにすっかり夢中になっていました。民衆はこの呼びかけに自分たちの救済を見ていたのです。もし、革命家たちによつてどのような救済が用意されているのか、民衆が理解できていたら！ ソロビヨフの「全的統一」の思想、これは全人類的問題のもつとも自然な解決法です。なぜなら、本質において、宗教と科学は人間自身の奪うべからざる特質であり、したがつてそれらは人類が存在するかぎり、つねに存在するだろうからです。もちろん、これはすべての人が宗教を信じるようになるということではあります

然に無縁の立場を掲げ、擁護した時代がありました。しばしば保守主義も科学の発展を抑えました。しかし、そのことから、それが科学の罪だということには決してなりません。罪と責任は人々に、そしてもっぱら人々にだけあるのです。私の深く確信するところによれば、今日、「全的統一」がとくに必要なのは、改革、それもいつも革命的性格の改革によって疲労困憊させられたわが国においてです。私の確信するところでは、ロシアが必要としているのは、法を厳守しながらの漸進的発展です。その場合にのみ、ロシアは、長年にわたつて権力の座にあつたまったく平凡であまり聰明でない指導者たちのために陥つた深渊から脱出することができます。もちろん、「全的統一」は自然にやつて来はしません。これは長い時間を必要としますし、関係するのは生活的物質的改善だけではありません。精神的再生にも関係します。これは教会の積極的な関与なしには考えられません。私はロシアで進行中のプロセスについてここで簡単に触れましたが、しかし私は、人間活動の精神面はどこの国でも特別の関心を必要としていると思います。なぜなら、この

ん。ただ一つ、疑いがないのは、人々の間の宗教的世界観は生きており、将来も生きるだろうし、科学はその世界觀を否定も確認もしないということです。なぜなら、両者は人間精神の別々の分野をカバーしているからです。

これまで私は、いくぶん断片的に、教会と科学の闘争の若干の事例に触れてきました。科学の成果が議論の余地なく、疑問を呼び起さない以上、科学はがんばりとおした、科学はこの闘争で勝利したと充分な根拠をもつて見なすことができるでしょう。これを認めないのは困難だと私は思います。しかし、これは、宗教的教義の破綻が証明されたということでは絶対にないのです。そのような結論を出すことは不可能です。それどころか、宗教と科学は本質的には、いまだかつて衝突したことがあります。なぜなら、教会と科学の闘争は、宗教と科学の闘争が起きていることを意味しなかつたからです。宗教も科学も、具体化されるのは、人々によつてです。何しろ、人々には真理が開かれていないのです。このため、彼らには過ちがつきものです。たとえば、科学には、自

己は人間活動のどの側面にもまして、つねに関心を必要としますし、大体において永遠に解決されることが決してありえないからです。人間の精神教育は、教会の積極的関与と社会の国家的支援のもとで初めて可能です。

もし科学と宗教の「全的統一」について論ずるならば、せめて簡単にでも科学と宗教の活動分野の特徴づけをする必要があります。科学も宗教も人間のために、人間の名において存在します。科学も宗教も、時には人間に奉仕しなかつたこともあります。しかし、これが起きたのはやはり、人々によつて指導される教会と国家が、庶民の利害とか離れた偏狭な利己主義的な利害に則つて來たという同じ理由によるものです。もちろん、これは教会の権威を高めませんでした。人間の生活における宗教のもともと十分に聰明でなければなりません。宗教と科学は人々重要な役割を理解しつつ、教会は、社会に蓄積され、その調和を乱している精神的欠陥にタイムリーに気づくほどためにひじょうに多くのことを共同ですることができます。

人間の精神的本質の形成、これはもつとも重要な、そして同時にもつとも困難な問題です。社会発展の各段階におけるその成功的な解決には、すべてとは言わないまでも、ひじょうに多くのことが左右されます。これは、精神教育だけが人格をつくるということからも、理解できます。過去を振り返り、われわれが今日もつてているものを考えるとき、完全に明らかになるのは、ロシアの民主的インテリゲンチアは長期間にわたって結局は社会を、創造ではなく、破壊へと導いたということです。そして、とくに驚くことには、彼らはこれらすべてのこと、民衆の生活をよくしようと考えながら、最良の動機から行つたということです。革命的民主主義者のベリンスキー、チエルヌイシエフスキー、ドブロリューボフ、ゲルツエン、オガリヨフ、その他多数の人たちは、民衆の苦しい生活を目にし、民衆を救おうと望みながら、実質上、ロシアに革命を呼びかけ、農民には斧を取るように呼びかけました。若い世代は彼らの名前でもちきりで山から付き落としたのです。ロシアの大作家ドストエフスキーは、これらの社会改革者たちの思想が何をもたらすかを天才的に予見し、彼らの精神的本質を小説『悪魔』で見事に描きました。作家ははつきりと、革命的実践が、目的は手段を正当化するという深く不道徳な思想を研究しながら、彼は、社会的手段は悪との闘争のためには不十分だと考え、人類のための精神的支柱を神の勝利につながることを見ていました。人間の魂の奥底には人類の中に、医師たらんとする社会主義者たちが予想しているよりも深く隠れている」と。残念ながら、この偉大な作家にして思想家だった彼の声は十分に伝わりました。

せんでした。なぜなら、社会の革命的改造についてのもつと素朴な思想が青年たちの未熟な知性をかき乱していましたからです。これらのすべてはひじょうにロマンチックに見えたので、若い令嬢たちまで引きつけたほどでした。しかし、おびただしい血が流されたとき、ロマンチシズムは跡形もありませんでした。だが、時すでに遅し。暴風は國中を荒れ狂っていました。なぜ、こういったことが起きたのか。ここでは多くの原因が一つに合わさっていました。私は一つだけ、ひじょうに本質的な原因に触れておきます。この原因是ここで検討されているテーマに直接かかわっているからです。残念なことに、教会は国民の中にしだいに蓄積されていたプロセスをタイムリーに理解できず、評価しなかつたのです。私の意見では、ロシアでは教会は長いあいだ、科学に対する自己の態度を立て直すことができず、そのため、この期間に科学において開かれた大きな成功を背景にして、教会は若い世代に積極的に影響を与える機会を失ったのです。まさに青年たちは実質上、教会の外にあつたのです。何しろ、青年たちは革命の主要な資材でした。

れた著作『古い同志へ』の中で、彼は、テロルと暴力によつては何も創造することができないことを理由に、国家廢絶、社会革命への呼びかけに反対しました。しかし、事はすでになされたあとで、ゲルツエンの革命的扇動は山から付き落としたのです。ロシアの大作家ドストエフスキーは、これらの社会改革者たちの思想が何をもたらすかを天才的に予見し、彼らの精神的本質を小説『悪魔』で見事に描きました。作家ははつきりと、革命的実践が、目的は手段を正当化するという深く不道徳な思想を研究しながら、彼は、社会的手段は悪との闘争のためには不十分だと考え、人類のための精神的支柱を神の勝利につながることを見ていました。人間の魂の奥底には人類の中に、医師たらんとする社会主義者たちが予想しているよりも深く隠れている」と。残念ながら、この偉大な作家にして思想家だった彼の声は十分に伝わりました。

教会はソロビヨフの「全的統一」の思想を支持しました。しかし、時機はすでに失われていました。もしこれにさらに補足的な諸要因、および國家権力の弱さと英知の欠如を加えるなら、ロシアが革命に向かって転がり落ちていったことはまったく明らかになるでしょう。しかし、今これを書くのはほんとうに簡単ですが、当時こういったことのすべてに気づくことができたのは相当に聰明な人たちでした。そういう人たちはいましたが、しかし、残念ながら、われわれのいわゆる民主主義者たちによつて何十年間も急回転させられた歴史の車輪を止めることには成功しませんでした。そして、この車輪は彼らも一掃したのです。現在、ロシアでは、ほとんど同様のプロセスが進んでいます。以前のロシアと同じように、またしても民主的インテリゲンチアが、もつとも、彼らは知的には大幅に薄められ、より素朴ですが、やはり国民のためだと称して（これが本心であるかは、疑わしい）、国を深淵へと押しやっています。自分たちもそこで破滅することを理解せずに。インテリゲンチアの創造的な部分は自分たちの努力を結集することができません。なぜなら、

まさにこの人たちはつねに、群集的な精神にまったく無縁なのです。彼らはめいめいが独立独歩です。ここに、平時における彼らの創造力があります。しかし、ここに、迫り来る激動のプロセスに直面したときの彼らの大きな弱点があります。彼らは、危険を目の前にして結集できるでしょうか、それとも再び、以前と同じように、歴史ののけ者になるのでしょうか。教会はこの国民の苦難のときにあたり、善の勢力の結集に役立つような積極的な調停の立場をとっているのでしょうか。今のところ、教会の声はあまりにも低いのです。ただ一部の聖職者たちだけがこの迫りつつある危険を理解し、積極的に自分の力のかぎり国民と祖国の幸せのために行動しています。教会は問題から手を引くべきではありません。なぜなら教会はつねに民衆と共にあらねばならないし、民衆とのみ、あらねばならないからです。われわれが目にしているのは、社会の精神生活において、社会の鎮静化において、庶民の利益のための団結の探求において、宗教と教会の役割がいかに大事かということです。このような道徳的に純粋な勢力は社会にはほかにありません。それゆ

えに、教会が造物主の意思を実行し、民衆の利益のため行動することができるか、それとも事態を静かに觀照しつつ第三者の立場に立つことになるかは、教会にかかります。もし教会が社会で生じている問題の水準に立つなら、その権威は増大し、したがつて民衆の精神的再生は速まるでしょう。すべては教会の英知と先見の明に、民衆と共に、ただ民衆とのみあるその能力にかかります。あるいは今回は、われわれの歴史が指導者たちも含めてすべての人に教えるかもしれません。われわれには一つの道しかない、それは緊急問題の解決に人々を結集することだと。なぜなら、社会に生じている権力機構同士の非妥協的関係には未来がありません。この道では誰にも勝利がありえないからです。人々の利益のための調和と妥協の道、生じている野心の克服、漸進的発展——これこそ唯一、われわれに必要なものです。未来の歴史は、そしてこれは今日のすべての指導者が理解しなければならないことですが、各人の行動に評価を下します。そしてもし彼らが歴史に汚れた足跡ではなく、しきるべき足跡を残すことを望むなら、今こそ考え直す時

当たり的な考え方からたまたま権力の高い地位に就き、状況を個人的目的のために利用しようとしている人たちには、こういったことはすべて取るに足りないことです。しかし、名誉、良心、誠実、祖国への奉仕といったことを単なる言葉と思わない人たちには、やはりこのことを理解し、結論を出すべきです。

あるのでしょうか、科学ではすべてが、何度も検証された事実に立脚しているというのは本当でしょうか？　あるいは科学には信仰に立脚した何かが存在するのでしょうか、あるいは科学者は仮説に基づいて話すことをどう好むのでしょうか？　科学は、われわれを取り巻く物質世界を、生命のない自然と生命のある自然の両方の物質世界を研究しています。生命のない自然の世界は、ミクロの世界から全宇宙まで広がっています。科学が発見する法則は普遍的で、地球上でも、全宇宙でも同一です。自然法則のこの共通性は、地上の条件のもとで実験と観察データに立脚して法則を発見し、これらの法則の

自然の根底には基礎的な法則が横たわっており、人間はそれらを科学技術の発展における進歩につれて発見していくということです。科学は、自然が認識可能であることを説明できません。これは仮説なのです。もう一つの基礎的な仮説が、因果律です。この仮説によれば、結果は原因に先立つことはできません。科学が研究するすべてのものは物質的自然をもっています。この事情もまた、基本的なエネルギー保存則として定式化されています。

この法則の骨子は、エネルギーは消滅せず、新たに発生しない、それは一つの物体から別の物体に、あるいは一つの形態から別の形態へ等量で移行するということになります。そういうわけで、科学には、科学の基礎には、しません。これらの現象は科学の視野には入っていません。科学の見地からは、そのような現象は存在しないと言ふことも可能でしょう。しかし、別の側からは、同じ

権利をもつて、科学はこれらの現象に関係がない、これらの現象は科学の外にあるからだと言うこともできます。まさにそのために、われわれが言えるのは、科学は宗教を確証しないし、これを否定することもしないということです。したがって、宗教の教義が科学的成果を受け入れ、これらを宗教的世界觀の構成部分として見なすならば、宗教と科学の間には矛盾はありません。過去の闘争の本質は、われわれが見てきたように、宗教が物質世界の領域に、すなわち、科学の領域に侵入したために起きました。

しかし、私が知るかぎりでは、そのような闘争は仏教にはありませんでした。この宗教教義がキリスト教より何世紀も早く誕生したにもかかわらずです。あるいはこれは、仏教では愛の宗教が特別の地位を占めていることによって説明できるのかもしれません。この側面は、とくにブッダの言葉に強く表れています——「勝利は憎しみを生む。敗者は不幸だからである」、「善意によつて怒りに勝ち、善によつて惡に勝ちなさい」。善の偉大さについてのブッダの言葉が恐らく、仏教において布教者た

ちと哲学者たちとの間に矛盾が生じるのを許さなかつたでしよう。ここではきっと、反対に、お互いを豊かにすることが進み、これは仏教と哲学の双方の発展に役立つたのでしょう。この例がはつきりと示しているのは、宗教教義と科学的觀念は、お互いを豊かにしながら、静かに共存できるということです。だから、きわめて多くの大学者たちが敬虔な信仰者であり、したがつて宗教的世界觀と科学的觀念が個人の中にまつたく静かに共住し、お互いを少しも邪魔していないのは、偶然ではありません。だから、同じような調和が社会でも起きないという深刻な根拠はまつたくありません。これらの人間精神の特性が造物主によつて人間に組み込まれている以上、このような調和はなおさら自然なもので。

最後に、私がこの複雑な問題の本質を真剣に考える機会になつた貴重な対話に対し、池田大作博士に深い感謝を表します。私の講演を傾聴して下さった創価大学の教授、教員、学生のみなさんに御礼申し上げます。

一九九三年九月十五日

文献 I・A・クルイベリヨフ著

『宗教の歴史』

モスクワ、1976年発行

(アナトーリ・A・ログノフ・物理学者、前モスクワ大学総長)

(訳・まつもと ゆきしげ)